

「郷友会の思い出」

かいらゆうだん

魁龍団とは何だったのか

清水敏夫 (高4回)

終戦の翌年、昭和21年に旧制飯田中学に入学した私の出身地伊賀良村に「魁龍団」と云う名前の団体があった。

同じ村から飯田中学に通う1年生から5年生による40人そこそこの集団だったが、戦前から長く続いていた伝統ある組織であった。入学した私は、早速この魁龍団に加入しその活動に参加することになった。当時の中学4・5年生は、身体も大人と変わらず髭面で、厚い朴菌（はらば）の高下駄でからころと街を闊歩していた。その姿は、未だ幼い1年生にとって、まるで親父のような近付き難い存在だった。

質実剛健を旨として

まず最初の夏休みに、キャンプ合宿に参加することになった。これは、村の西外れにある鳩打ち峠を越えた所に流れる黒川という阿智川の上流で、1週間の原始生活

夕闇迫る頃になると校庭の一角に円陣を組んで、北は旧制北大予科から南は旧制第五高等学校の寮歌を声高らかにうたい、最後は母校の校歌と団歌で締めくくって解散。各自意気軒昂として家路につくのである。

いちばん困ったのが試胆会という行事で、下級生が1人ずつ村内数箇所の墓地を回らされるのだ。何がイヤだったのかというと、青白い浴衣姿の幽霊が現れるのである。もちろん、先回りした先輩が変装したものだが、腰が抜けるほど怖いものであった。

学問・文化への希求も高く

魁龍団は質実剛健をモットーにするだけではなく毎年春と秋の2回、団員による文集を編集した。また、先輩諸氏から寄贈された本の図書館があって、本の貸し出しがおこなわれており、文化面での活動も盛んであった。当時ここで借りて読んだ捕り物帳や探偵推理小説などは、今も記憶に残っている。

毎年お盆で帰省の時期になると、夏期大会なる催しを行い、都会から帰省された先輩をお招きして、世の中の話を聞かせてもらうこともあった。今のように情報が多くなかった当時、「都の塵も通い来ぬ」伊那谷の中で安住する我々は、まさに「井の中の蛙」同然であったので、



●しみず・としお
飯田市伊賀良（現・育良町）出身。東京外国語大学卒業。（柳神戸製鋼所入社後、中近東・アフリカ諸国向け製鉄所など各種プラントの輸出と建設プロジェクトに従事。中国北京事務所長など歴任。中・高では山岳班で山歩きに没頭。

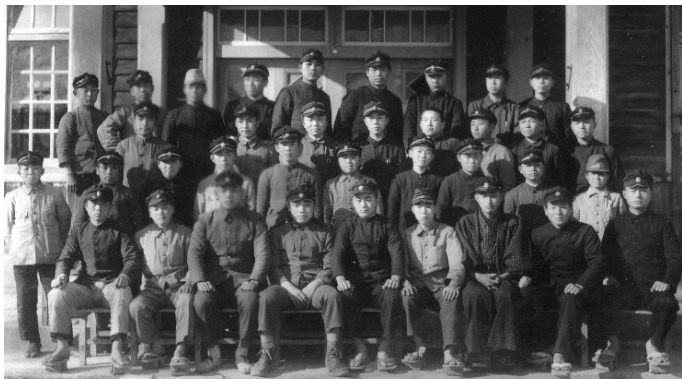
を体験する行事だ。1年生は全員強制的に参加させられた。キャンプリーダーは怖い4年生だった。鍋釜と米、味噌、醤油、それにテントを背負って出発。峠を下った川辺にテントを張って設営を終えると、全員越中禪一つになって冷たい溪流に飛び込んで泳ぐのだが、なにしろ川の水が氷の様に冷たくて、川の中にはものの10分間も居られない。冷えきった身体を岸辺の大きな岩石に横たえて温めては、また川に戻り、時々周りの斜面を攀じ登って野苺やあけびなどを採って食べるといった生活だった。食事は釜で炊いたご飯と味噌汁だけで、味噌汁の具は茄子や胡瓜などの野菜。川で捕まえた鮎やひき蛙などは貴重なタンパク源だった。この1週間の野営を終えてようやく、1年生は魁龍団団員として認められたのである。

毎週土曜日、下校後の定例会もあった。全員村の小学校に集まり、バスケットボール、野球、テニスで汗を流し、こうした諸先輩の話は大変新鮮であった。

当時は、日本中が敗戦による挫折と戦後経済の混乱による困窮の中にあつた。しかし、それに屈することなく各々が高い志を持ち、意気軒昂に前に向かって歩んでいった若人は、この魁龍団という組織に限らず、あの伊那谷の各地に、そして日本各地に、多数いたのではないだろうか。こうした若人のエネルギーがその後、

我が国の高度成長の一翼を担う大きな力になったのではないかと思う。

母校を離れ、それぞれが歩んだ路こそ違つたが、同じ故郷の山野で培った志を胸に、戦後の社会を全方で突き進んだ先輩、同輩諸氏に、改めて敬意を表したい。



当時の魁龍団団員。前から2列目の右から3人目が筆者